The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

『法華経』におけるアスラ

冨田真浩

1．はじめに

筆者が指摘してきたように，アスラ（asura）の概念は，記される典籍において異なっており，「ウパニシャッド」（*Upaniṣad*）や初期仏典である「ニカーヤ」（*Nikāya*）などの文献において，その変遷を見ることができた．アスラの概念の変化は大乗仏典においても同様であろうとの推測のもと，代表的な初期大乗仏典である『法華経』（*Saddharmapuṇḍarīka-sūtra, SP*）の調査を行った．

*SP*は一般にAD50年～AD150年に成立したと考えられており，様々な写本が発見されているが，サンスクリットの写本ではネパール本が完本であるとされている．*SP*は，サンスクリット写本と漢訳本では章立てが異なるが，本論文では，インドにおけるアスラの概念の変遷を追っている為，サンスクリット写本に準拠する．また，サンスクリット写本にも様々なものがあるが，本論文では定本として定評のあるケルン・南条本を用いることにし，現代語訳の［松濤他2001］［松濤他2002］を参照した．*SP*の成立年代に定説ではないが，田村芳朗氏[1)]の見解によれば，まず第2～9章が編纂され，第1・10～20・27章が次いで編纂され，最後に第21～26章が編纂されたとされる．これらの編纂された順に従い「第一期法華経」（*1st SP*）「第二期法華経」（*2nd SP*）「第三期法華経」（*3rd SP*）とし，成立期毎に考察した．

2．第一期法華経におけるアスラ

先行研究の説を受けて第2～9章を第一期として考察する．*1st SP*はAD50頃に成立したと考えられており，アスラの描かれる章を考察した．

第3・7章において，アスラを三善道の1つと見なしており，デーヴァとアスラに差を設けていない点が共通しており，第7章ではデーヴァとアスラの差は全く見られないのだが，第3章では一般のデーヴァとアスラには差を設けていない

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

ものの，デーヴァの王であるインドラ（Śakraś ca devānām indro）とアスラには差を設けており，インドラの方がアスラや人間よりも優れた存在であるかのように別記されている点で第7章と異なる．この第3章の特徴は*SP*の中でも特殊な章であり，他の章には見られない．「ニカーヤ」においても『サムユッタ・ニカーヤ』（相応部経典，*Saṃyutta-Nikāya, SN*）のみ見られる特殊な例であると言える．また，*1st SP*では同章のみデーヴァ・ナーガ・ヤクシャ・ガンダルヴァ・アスラ・ガルダ・キンナラ・マホーラガという「八部衆」の典型的な表記がある．

第5章においては，上述の第3・7章同様に三善道の1つとしてアスラを扱っていると考えられる．というのは，この章において世尊が如来について語り，如来の説法の対象としてデーヴァ・人間・アスラを一括りにしているからである．しかし，如来の呼びかけの中にはアスラが含まれていない．そのためか松濤・長尾の両氏の注釈によると，如来の説法により生まれることのできる「善趣」を「天と人間の二趣[2)]」とされている．この考えに従うと，アスラを三悪道よりも上位の存在としつつもデーヴァと人間の下位に位置する四悪趣の1つと捉えていると考えられる．しかし，「善趣」の部分は，原典では両数形ではなく複数形で書かれているため，アスラをデーヴァと完全に同一視していると考えることもでき，この第5章も第7章と共通していると考えるのが妥当であろう．

第6章では，アスラを四悪趣の1つとし，デーヴァと人間よりも下位の存在として扱っており，第5章の解釈を松濤・長尾両氏の見解に沿わせるならば第5章と共通していると考えることができるが，この6章のみがアスラを悪と見る*1st SP*において特殊な事例と捉える事もできる．

*1st SP*におけるアスラの概念は固定化されておらず，善としても悪としても描かれるが，*SN*と同様にデーヴァと同等の存在として扱いつつもインドラよりも下位の存在として位置づける記述があることが特徴的である．

3．第二期法華経におけるアスラ

*1st SP*と同様に，第1・10～20・27章を第二期として考察する．*2nd SP*はAD100前後に成立したと考えられており，アスラの描かれる章の考察を行った．

この*2nd SP*でアスラの記述がある9つの章のうち，第15・19・27章を除く6つの章で「八部衆」の1つとしてアスラをデーヴァと同等に扱っている表現があり，第15・19・27章においても三善道の1つとして善い存在として扱っていると言える．しかし，第18章は特殊で，章内に7箇所のアスラに関する記述があ

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

るが，その内1箇所で地獄・餓鬼・アスラ・畜生の順で記される部分があり，アスラを悪趣として捉えている部分と善趣として捉えている部分が混在していると言える．また，アスラと直接の関係は少ないが，この部分を除いて，この章全体では六道を記す部分では「地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上」の順で記しており，*Nikāya* の「地獄・畜生・餓鬼・修羅・人間・天上」からの変化が見られる．

4．第三期法華経におけるアスラ

1st SP・*2nd SP* と同様に，第21～26章を第三期として考察する．*3rd SP* は AD150頃に成立したと考えられており，アスラの描かれる章を考察した．

この *3rd SP* には，*SP* 全体を見ても特殊な部分がある．それは第22章であり，1つの物語の中に，三世に渡ってのアスラの変化が記されている．まず，過去世においてアスラは四悪趣の1つとして記され，（*SP* の中での）現世では八部衆の1つとして善趣として捉えている．そして未来世においては，直接アスラについて記されているわけではないが，魔に属するデーヴァ・ナーガ・ヤクシャ・ガンダルヴァ・クンバーンダの存在が描かれている．このことは，『リグ・ヴェーダ』（*Ṛg-Veda, ṚV*）でアスラが善神の位として描かれていたことは考慮せず，『ブリハドアーラニヤカ・ウパニシャッド』（*Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad, BU*）・『チャーンドーギヤ・ウパニシャッド』（*Chāndogya-Upaniṣad, CU*）・『カウシータキ・ウパニシャッド』（*Kauṣītaki-Upaniṣad, KU*）に見られた悪の象徴としてのアスラから *SN* や『ディーガ・ニカーヤ』（長部経典，*Dīgha-Nikāya, DN*）でデーヴァと同等の善神として描いた物語へと時代によって変化したアスラの概念を1つの物語の中で説明したと考えることが出来よう．

この *3rd SP* では，*2nd SP* で現在の順になった三悪道の順序が *1st SP* や *Nikāya* と同じ様に「地獄・畜生・餓鬼」の順に戻されている．また，「八部衆」に属する者が列挙されるに場面では，すべて現在記される一般的なデーヴァ・ナーガ・ヤクシャ・ガンダルヴァ・アスラ・ガルダ・キンナラ・マホーラガの順で記され，表現が定着し始めたと考えられる．だが，第23章においてデーヴァと人間に加えナーガ以外の八部衆を加えて記し，続いて地獄・畜生・餓鬼の三悪道の記述がなされる場面があり，六道と八部衆の思想の統合を図ったものと考えられる．

5．まとめ

SP において，アスラは悪として描かれることも善として描かれることもある

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

が，悪として描かれることは圧倒的に少なく，基本的には「三善道」の1つとして，もしくは「八部衆」の1つとして描かれており，善趣として扱われている．アスラは前16～前11C頃に成立したとされる*ṚV*において善として描かれ，前9～前6Cに編纂された*BU*・*CU*そして前6Cに編纂された*KU*の3つの初期ウパニシャッドにおいては悪として描かれている．その後，前3～2C頃に編纂された「ニカーヤ」においてアスラは善としても悪としても描かれているが，初期大乗仏典である*SP*になるとバラモン教との差別化からか，衆生済度を目的とした意識の現われか*ṚV*への回帰か判断できないが，善神として扱う方向へシフトしていると考えられる．そして善神へと変化していく過程で「八部衆」の表現が生まれていったのだろう．だが，*SP*においては「八部衆」の概念も「六道」の概念も定着していたわけではなく，以降に成立していく経典において形式が一般化していくと推測することが出来る．

1）［松濤他2001，pp.315–316］．　2）［松濤他2001，p.297］．

〈参考文献〉
布施浩岳『法華経成立史』大東出版社1934.
山田龍城『大乗佛教成立論序説』平楽寺書店1959.
水野弘元監修『新・仏典解題事典』春秋社1966.
金倉圓照編『法華経の成立と展開』平楽寺書店1970.
H. Kern, Bunyu Nanjio, *SADDHARMAPUṆḌARĪKA*. BIBLIOTHECA BUDDHICA. X. OSNABRÜCK: BIBLIO VERLAG, 1970.
紀野一義訳「法華経」（中村元編『大乗仏典』所収）筑摩書房1974，pp.59–170.
静谷正雄『初期大乗仏教の成立過程』百華苑1974.
坂本幸男・岩本裕訳注『法華経（上）［全三巻］』岩波書店1976（1962）.
———訳注『法華経（中）［全三巻］』岩波書店1976（1964）.
———訳注『法華経（下）［全三巻］』岩波書店1976（1967）.
江島恵教他『梵蔵漢　法華経原典総索引』霊友会1986.
塚本啓祥『法華経の成立と背景』佼成出版社1986.
勝呂信静『法華経の成立と思想』大東出版社1993.
松濤誠廉・長尾雅人・丹治昭義訳『大乗仏典4　法華経Ⅰ』中公文庫2001.
松濤誠廉・丹治昭義・桂紹隆訳『大乗仏典5　法華経Ⅱ』中公文庫2002.

〈キーワード〉　アスラ，『法華経』，六道，五道，八部衆

（日本大学大学院）

NII-Electronic Library Service